

## 油彩

(テンペラ併用)

ガラスの静物を描く③

## 三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東北女子大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館  
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼・現  
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在('96  
 '97) 春陽会会員



(図1) アンドレア・マンテーニャ  
 「短縮法」と呼ばれる奥行きの作り方を使った、当時としては画期的な作例。



(図2) メロツツオ・ダ・フォルリ  
 一点透視図法で描かれた典型的な例。

## ■ パースペクティヴ

について

今回の作品のガラスに敷いた布には格子の織目模様があります。

描いている視点が低い位置のため、この格子模様はいわゆる「パースがついて」見えるはずですが。

パースとは Perspective の略語で、遠近法のひとつである。線遠近法(透視画法)のことです。遠くのものほど小さく、近くのものほど大きく見えるわけですから、それを合理的に図法で表現することがパースペクティヴと言うわけです。

これもまた、数々の発明発見がなされた、ルネッサンス時代に発明されたものですが(図1、2)、ちょうど平行な2本のレールが地平線線上の一点で交わるように、一点から放射状に引いた線上に置くことで、モノの遠近が変化して見えるように表す方法です。(図3)

人間の目の高さは大抵、150cm、160cm位ですが、この高さは水

平線上にいる人は、ほとんどゼロに等しいはずですが。すなわち、水平線の位置というのは、見ている者の目の高さということになります。

そして、たとえばコインをちょうど目の高さに持ち上げると、表面の絵柄が見えずに側面しか見えなくなり、これが遠くになれば、幅も厚さも点にしか見えなくなってしまうのです。

このように、目の高さ＝水平線にある最遠のものは、縦も横も高さもゼロになってしまうのです。このゼロになってしまう点を「消失点」と言い、すべてのモノはこの点から放射状に引いた線上に位置しているわけなのです。

この消失点を1つ使うものを一点透視図法と言い、他に、2つ使う二点、3つ使う三点透視図法という3種類がよく使われます。

これは、モノをどの角度から見るとかによって使い分けられます。

(図4)

## ■ 事実と真実

ところで、上記の作図法というのは大変科学的で合理的なように見えますが、実は、これはあくまで約束事であり、事実ではないというのをご存知でしょうか。

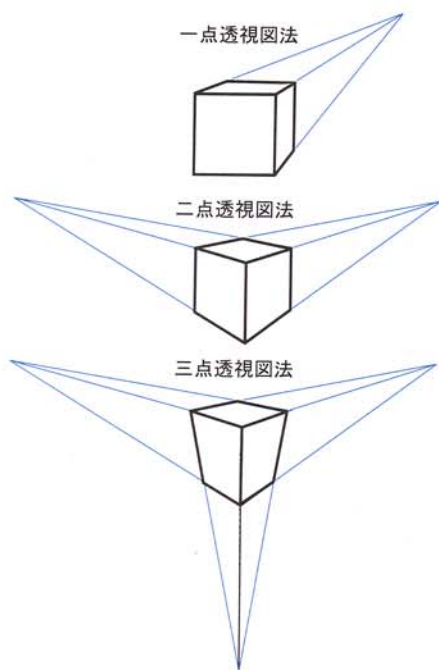
遠くのもの小さく見えるということは、左右方向のみならず、上方にも下方にも、斜め方向にもあらゆる方向に縮小して見えているはずなのです。たとえば、2本の電柱があれば、その間隔は上に向かうに従って、湾曲しながら、だんだん狭まっていくはずなのです。集合写真などで、端の人が妙に歪んで写っているという経験はありませんか。これは、レンズのせいなどではなく、このことが原因しているのです。

私たちはこのような歪んだ写真を見て、不自然に感じます。先の電柱などは、むしろ、湾曲していない平行線で表した方がより自然に感じるでしょう。

(図3) 三浦明範「窓辺の情景」  
床・壁・ブラインドなどに透視図法を利用した。



(図4) 透視図法



(図5) バプロ・ピカソ「卓上の頭蓋骨、ウニ、ランプ」



これは、私たちの眼から入る情報を、脳が修正しているからなのです。直線は、あくまで直線なのです。眼から入った湾曲した線です。脳は直線として認識するのです。そして、あたかも直線として眼から入ってきたものと、思い込んでいただけなのです。これが事実な

のです。

では、「絵を描く」ということは、「事実」を描くことなのでしょう。否、「真実」を描くことなのです。眼に見える「事実」が湾曲した線であろうと、「真実」は直線なのです。同じように、立方体の側面が菱形に見えようと、「真実」は正方形なのです。

しかし「真実」だけで表現しようとする、今度は、逆にそれらしく表現できなくなってしまいます。立方体を、正方形だけでは表せません。

結局、私達が表現できる許容範囲内での「真実」で表現せざるを得なくなるのです。たとえば、斜め上方から見たテーブルを表現する時、テーブルが四角いという「真実」を表したければ、真上から見た形(長方形)に脚を4本描く事になります(図5)。しかし、これでは上に乗っている皿は落下してしまいます。皿がしっかり乗っているというところが「真実」ならば、テーブルは菱形に表さざるを得なくなります。

つまり、表現者が何を「真実」として捉えるかによって、その他の事柄はある意味では、虚偽を表さなくてはならないのです。その約束事のひとつが、先のパースペ

クティヴということになります。虚偽があらうと、それが絵の中では真実であれば、その絵はすべて真実なのです。まさに絵は「絵空事」なのです。

### ■「ガラスの静物」の制作

この作品では、ごく小さな部分でパースペクティヴが生じています。布の織目とピンクとブルーの格子模様です。しかし、かなり低い視点で描いていますので、正確には数ミリの範囲にたくさんのパース線が入ることになってしまいます。このような場合、作図法などはほとんど無意味なことですので、大体のところ処理してしまいましたが、それでも頭の中では、先の消失点の位置はしっかりと把握しておかなければなりません。

また、今回のテーマであるガラスは、最もおもしろく感じるのがその質感表現です。強い反射と、透けて見える色彩の複雑さで、その質感が現れます。さらに、今回はガラスが落とす、半透明な影の面白さが加わります。

1 前回は、3回目の固有色を着けたところで終了でした(制作過程15)。

2 この上から、もう一度テンペラ白で起こしますが、ほとんど

(制作過程15)  
前回までの制作。



(制作過程17)  
壁に油彩固有色、  
テンペラ白。



(制作過程16)  
テンペラ白の浮き出し。



(制作過程18)  
布に油彩固有色。



最終段階に入っていますので、ハイライトのみの表現になります。布は織目の方向でパースをつけていきます(制作過程16)。

3 壁の細部を描きます。全体にシルバー・Wとアイボリー・Bのグレイ調子に、イエロー・オーカーと少量のセルリアンを加えて薄く塗布します。その上から同色で、ひびや凹凸感を強調し、最後にテンペラ白で明るい部分を強調します(制作過程17)。

4 布に最後の固有色、クリムゾン・レーキ、コバルト・ブルー、シルバー・W。ガラスの固有色、ヴァイリジアン、アイボリー・Bも彩色します(制作過程18)。

5 最後まで取っておいた、壁に落ちるガラスの影を描きます。私には、一番描きたいところを最後まで取っておく癖があります。「おいしいものを最後に食べる」ということもあります。これで完成という、自分自身への宣言のようなものです。よく、どこで筆を置けばよいのかわからないという人がいますが、私はこれを各台図にしているわけです。

テンペラの残っている部分に、ごく薄く油彩をグラッシーして、ようやく完成です(制作過程19)。



(制作過程19) ガラスの影を描いて完成 **完成作品** ガラスの静物 F6号

シナベニヤパネルに寒冷紗、白亜地、テンペラ・油彩。